

虹っ子福島新聞

発行元

コープこうべ
虹っ子福島
平和スタディ
ツアー

東日本大震災被災地訪問

平和スタディツアーの7人 福島へ



世界中で大地震をはじめとする自然災害が相次ぎ、民族や宗教の違いから紛争が絶えない中、地球上のすべての命を慈しみ、平和への誓いを新たにしようと、次代を担う子どもたち7人が「コープこうべ虹っ子平和スタディツアー」福島の一員として、東日本大震災の被災地で原発事故の影響に苦しむ福島県を訪れました。

関西一円から参加した中学、高校生の7人は、次代に平和をつないでいくために、学んだことを新聞にして報告するための事前学習会に参加し、被災地を訪問しました。

21日目は、東京電力廃炉資料館で原発事故当時の状況や廃炉事業の現状を聴き、

「リプルンふくしま」では放射線に汚染された土の埋立処分について学んだほか、空間線量率のモニタリング体験もしました。

22日目は、震災を伝える「東日本大震災・原子力災害伝承館」を訪ね、日常生活の変化、放射線への不安や風評被害など、被災し

たスタッフや語り部の案内を受けました。震災で展示物の約9割を失った水族館「アクアマリンふくしま」は4カ月後に営業を再開したといい、現在、約800種の生物を紹介していました。

3日目は「福島白はとファーム」へ。津波で冷却機能を失い大き

な事故を引き起こしてしまいました。大気中に放たれた放射線の影響で周辺区域は生活困難地域となり、「原子力はクリーンな未来のエネルギー

」という市民の期待を裏切る形となりました。なぜ、家屋は地震では倒壊しなかったのに一面が更地になってしまったのか。なぜ、自動停止し

たにも関わらず、原発事故は起きてしまったのか。その原因は津波にありました。

宮城県の閉上中学校に通っていた息子を失い、震災を伝える施設「閉上の記憶」の語り部をする丹野祐子さんの言葉で気づかされたことがあります。「卒業式の後、大きな地震があり、津波警報が出た。でも、私たちは逃げなかつた。なぜなら、地震が来ても津波は来ないというのがこの町の誇りでもあったから」。私が暮らす地域も年に数回、大雨警報や注意報が発令されます。備える気持ち忘れなideたいと思います。(望月拓人)

マグニチュード9の大地震が東北地方沿岸を襲った50分後、津波は福島第一原発を飲み込みました。津波高は最大で約15m。原子力発電所では緊急停止ボタンが作動し、原子炉が冷却されたものの、海水ポンプが機能せず、膨大な熱が発生しました。やがて水素爆発を起こし、大量の放射線が大気に放出されたのです。地震から5時間後、原子力緊急事態宣言が発令され、半径20km圏内の住民に避難命令が出ました。地域住民の捜索もできないまま、このままです。約505万の停電に加え、放射性物質を含む雨が農作物をむしばみました。この激震で福島県内では1614人が犠牲になりました。3か月後の放射線量は検出されませんが、健康に影響する放射線量は検出されませんでした。畜産が盛んな福島では、当時65万頭以上の家畜が被災地に取り残されました。(後藤スミレ)

い地域で大規模なサツマイモ畑が運営されていました。鮭や鮎の孵化場を持つ木戸川漁協は、津波でがれきが川を逆流して甚大な被害が出ました。2016年の放流再開後も戻ってくる鮭は少ないそうです。震災を伝える「閉上の記憶」では、中学生の子を失った母親の話に耳を傾けました。(侍島理実香)

3月11日午後2時46分に発生した大地震に伴い、福島第一原発には午後3時半に巨大津波が襲来し、全ての冷却装置を含む重要な施設が浸水しました。この影響で、原子炉を冷却できなくなり、炉内の温度が急上昇したのです。やがて被覆管であるジルカロイ製の筒が高熱下で水に反応し、水素が発生(2r+2H2O→ZrO2+2H2)。翌12日午後3時36分、1号機が爆発し、外部に放射性物質が大量放出されてしまいました。

14日午前11時1分には、2号機、その数分後には3号機と立て続けに水素爆発が起きました。3号機の爆発後、さらに増加し続けた水素は、定期検査のため運転していない4号機にも流れ込み、水素爆発を引き起こしました。

大震災から13年が経ちますが、今なお、原発の廃炉計画だけでなく、汚染土の処理方法や処理水の放出をめぐるさまざまな問題が解決できないまま、時間が経っています。被災した全ての福島の人々が、ふるさとに帰ることができるよう日はいつ訪れるのでしょうか。阪神・淡路大震災があった地に暮らす者として、東日本大震災の被災地の人々に、関心を持ち、心を寄せ続けたいと思います。(山田大登)

故郷を追われた人々



原発事故が問うもの



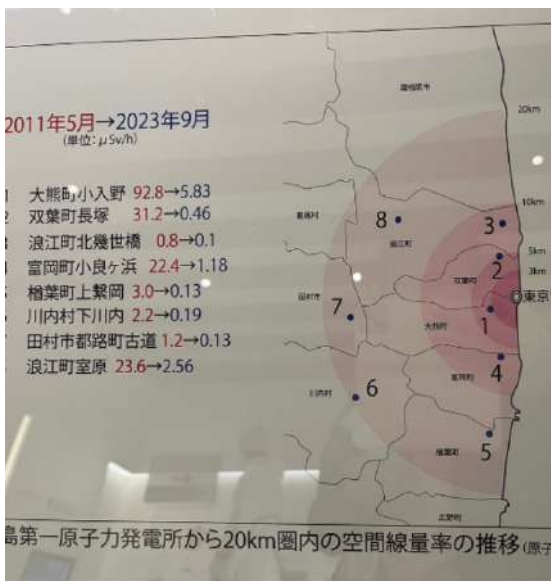
虹っ子福島新聞

発行元

コープこうべ
虹っ子スタディ
ツアー

難題山積の原発事故処理

最優先はデブリ取り出しと処理水放出



東京電力福島第1原発では、タンクにたまり続ける処理水の海洋放出や、事故で溶融した燃料(デブリ)の取り出しを巡り、事故から13年の月日が経った今も、原発廃炉への道のりや、周辺地域の安全、避難している住民の帰還などについては見通しがたないままです。これらの問題が解決するのはいつになるのでしょうか。

福島第1原発では、放射能による立ち入り禁止区域は、除染が進んだことにより現在では震災直後よりも格段に縮小されていますが、未だに一部地域では自宅に帰って住むことができない方がいます。処理水は国際放射線防護委員会(ICR)が提唱する動植物への基準値に対して300万分の1から100万分の1という結果が出ており、人や環境に対して安全であるというのを確認してから放出されています。処理水は発電所の沖合約1kmまで海底トンネルで運ばれ、周辺海域よりも放射線濃度が

油断が拡大させた被害

東日本大震災は地震、津波、原発事故が同時に起こった複合災害です。

高くなっている範囲は発電所周辺2〜3kmの広い範囲で、漁業が日常的に行われていない海域に放出されています。さらに、Web上で海水や魚などの放射線量の分析結果や、処理水で飼育している魚や貝などの映像が24時間ライブで公開され、処理水の安全性を見える形で証明しています。(友成浩基)



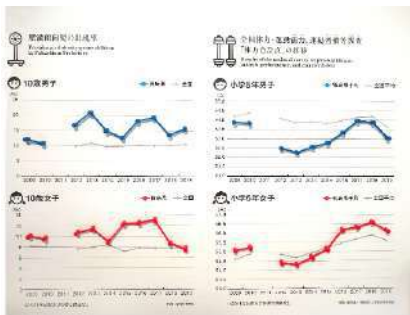
だが、実際には予想をはるかに超える大津波が町を襲いました。「大丈夫だろう」という思い込みが、備えを怠らせ、避難を遅らせましたのです。福島第1原発では、判断と権力が所長に集中していたため、さ

廃棄物処理の現状



リプルン福島では安全対策の進捗状況について取材しました。福島第1原発の事故によって放射性物質に汚染されたごみの処分や、特定廃棄物の埋め立て処分の事業などです。大震災という想定外に発生した放射性物質の複合災害によって、廃棄物の種類について説明を聞きました。廃棄物には主に3種類

避難生活の影響心配



放射線に汚染された地域は、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に分けられており、福島県内の安全な地域や他府県が避難先となりました。2011年6月から、避難生活者の県民健康調査が実施されました。このうち子供では、情緒不安定、肥満、運動不足が増加し、大人では、うつ病をはじめ、高血圧、肥満、脂質異常、糖尿病が増加しています。(山田大登)

さまざまな事故状況に対応する責任が分配されず、異変に気づくなどしても言いづらいう雰囲気になってしまっている。人は「まさか自分だけは大丈夫だろう」となると、自分に都合のいいように考えがちです。日常から「備え」は大切ですが、何かが起こっても備えた以上の行動はできません。(後藤莉々唯)

虹っ子福島新聞

発行元

コープこうべ
虹っ子
平和スタディ
ツアー

震災後の復興計画と対策

同じ被害繰り返し返さない決意と備え



東日本大震災から13年が経ちました。津波被害が大きかった沿岸部では、防波堤や道路、鉄道などのインフラも整備され、着実に復興が進んでいます。福島第一原発事故の影響、風評被害、長引く避難生活、観光復興そして教訓の継承など、被災地が以前の姿に戻るためには、まだまだ解決が急がれる課題がたくさんあります。

想定を大きく上回った震災を経て、私たちはどんな教訓を得たのでしょうか。次代へと活かせることはないのか。当時、閉土中学校に通っていた息子を失い、津波復興記念資料館「閑上の記憶」で語り部をしている丹野祐子さんの言葉に私は気づかされました。

卒業式の後、大きな地震がありました。津波警報が出ました。でも、私たちは逃げなかつたんです。なぜなのか。地震が来て津波が来る、というのはい、津波復興記念資料館「閑上の記憶」で語り部をしている丹野祐子さんの言葉に私は気づかされました。

合われます。学校が休みになるので喜んでいましたが、よく考えたら「ここは大丈夫」という過信が大きな被害や尊い命を失ってしまった。福島の被害が大きかった地域では、津波避難タワーが

建設されています。多くの犠牲を出す原因となった過信を、いつ大きな津波が来ても大丈夫という自信に変えるため、あの日を胸に備えているのだと感じました。同じことを繰り返さないように、忘れないように。ずっと中学生の先輩は、敷地内の慰霊碑から静かに在校生を見守っています。(望月拓人)

震災後、福島県は原発事故に端を発した多大なる風評被害の影響で、観光客は震災前と比べて2000万人以上も減少しました。これに対し、福島県では主に三つの観光誘致の取り組みを行っています。

一つ目は、県内の周遊促進です。福島の震災前からの観光名所である花見山や鶴ヶ城、高湯温泉などを訪れることのできるツアーを組み、福島元来の魅力を伝えていきます。二つ目は、ホープツアーです。現地へ赴いて、福島ありの

ままの姿を実際に見聞させる中で、震災や原発事故の被害をどう教訓として生かしていくのかを考える教育旅行プログラムです。そのため多くの生徒や団体がツアーに参加しており、さまざまな気づきから、自分自身をも

被災地に人を呼び込め



成長させる旅として参加者が増え、人気が高まっています。三つ目は、インバウンド(訪日外国人客)です。外国人の関心の高い旅行商品の創出や、戦略的プロモーションを実施すること、国外からも広く注目を集めています。これに伴って、仙台空港に増やしていくだろうと予測されています。(井上実咲)

地域知り命を守る



東日本大震災では、津波が予想していた高さをはるかに超えたり、原発の状況について知らなかったり、想定外の揺れがあったりと、想定外のことが起こりました。用意していた非常

用の設備の一部も使用できなかったり、原発の状況について知らなかったり、想定外の揺れがあったりと、想定外のことが起こりました。用意していた非常

害ができました。「想定外のことが起こることを想定する」ことが大切だと学びました。ハザードマップなどに頼るだけでなく、自分事として対策

ITが活きた初の震災



科学技術の進歩は、震災へも多くの影響を与えました。GPSによる位置情報、ネットによる風評被害など、IT(情報技術)が活用された震災は、東日本大震災が初の事例となりました。

IT技術活用による好影響もあります。SNSやGPSでの消息情報共有、避難情報発信、不安や緊張を緩和させました。支援活動では新たな資金調達手段としてクラウドファンディングも登場しました。(井上実咲)

脱走や誤った指示などの拡散が問題となり、このような情報発信は日常でもありますが、災害などでパ

り、東北地方が海外からもより訪れやすい観光地となりつつあります。これら三つの取り組みによって、福島の観光客は現在、560万人まで回復しました。そして、各地の懸命の努力もあり、これからも観光客は順調に増えていくだろうと予測されています。

虹っ子福島新聞

発行元

コープこうべ
虹っ子
平和スタディ
ツアー

問われる日常の防災意識

想定外を想定しよう



「天災は忘れたころにやってくる」と言われます。皆さんは、いつかで、どんなかたちで起こるかも分からない災害に、どんなふうに対応していますか。福島第一原発の事故について調べ、教訓を学ぶうちに、常に想定外のことがかかるかもしれないという意識を定めておく、大きな視点で備えることが大切だと感じました。

災害はいつどこで起きるか分かりません。自分や周りの人の命を守るためにも、日ごろからの備えが重要になってきます。

福島第一原発事故では、一時移転や避難が必要になった人が多かったのです。急な指示にも対応できるように、普段から対策を行

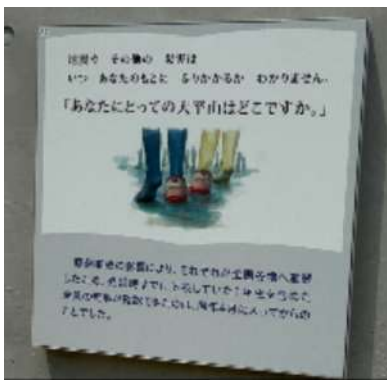
うことが必要です。原子力発電所で働いている従業員の方々は、津波や地震が起きたら、まず最初に発電所が稼働しないように発電を止めるための準備を行っています。この災害を踏まえて、制御棒を作動させ、中性子を吸収することで、核拡散を防いで被害を最小限に抑えるのです。過去に何度も原子力発電事故が発生しているにもかかわらず、いまだに原子力発電が存在していることについては、賛否が分かれています。危険だが核の力をつかうことで、簡単に大量の電力をつくれることができます。原発関連の事業で、大

きな利益がもたらされていることも事実です。けれども、ひとたび事故が起きてしまうと被害は甚大です。常に万一の事態を念頭に置いておくことが必要です。原発が近くにない地域でも、影響は及びます。広い視点で防災意識を持つておくことが重要です。(後藤莉々唯)

自分の大平山を探そう

「あなたにとっての大平山はどこですか？」

これは、私が訪れた請戸小学校のパネルにあった言葉です。小学校の児童がよく知り、あの日、津波から逃れた先の大平山のような場所は身近にありますか？との、命を守るための問いかけです。自然災害は防ぐことができません。いつ、どこで起きるかも分からないし、経験も少ないから機会がないと、普段から深く考えることもありません。自然災害は、いつも想定外のことがかかります。



「他人事」ではなく「自分事」として考えてみてください。自分事として捉えることで、自ら考え、行動

海外からも支援



東日本大震災後、被災地は日本国内だけでなく世界163カ国、43の医療機関から支援がありました。日本国内ではインターネット上で日本初のクラウドファンディングサイト「READYFOR」がつけられたり、多くの人がボランティアとして被災地に入るなど、復興に向けて多くの人が行動を起こ

「他人事」ではなく「自分事」として考えてみてください。自分事として捉えることで、自ら考え、行動

しました。クラウドファンディングでは2020年までに約10億円に上る支援金が集まり、民間の放射能測定室兼検診センターを開設するなど、復興に向

ツアーに参加して



し、自分の命を自分で把握していますか。その場所や経路が使えるかどうか考えていますか。あらゆる可能性を考え、友達や親戚と共有することは大切で

近い将来起こるとされる南海トラフ巨大地震だけでなく、日ごろからさまざまな災害に備えておくことが大切です。(寺川あやね)

◆震災と原発事故を学び、その爪痕を知った。常に備え、どこで震災が起きても支援したい。(山田大登)

◆浪江町の小学校で実際に使われていた給食の鍋が残り、何が起ったか身近に感じられた。(後藤スミレ)

◆雨で警報でも自分は大丈夫と思っていたが気がついていたら被災地訪問は大きな学びだった。(望月拓人)

◆旅に参加するまで何も知らなかった。東日本大震災の知識が得られて、見方も変わった。(友成浩基)

◆閉上で感情がこもった語り部の話があった。楽しく参加でき、学べる機会が多かった。(井上実咲)

◆閉上で息子を亡くした語り部の話が強く感じた。皆と仲良くなり、沢山のことを学べた。(寺川あやね)

◆訪ねることを詳しく知った。閉上で聞いた語り部の話が心に響いた。(後藤莉々唯)